

[07] 千歳川遊水地へツルを呼び込むことができるか？

正富 宏之[○] (無所属)

正富 欣之 (NPO 法人 タンチョウ保護研究グループ)

19 世紀半ばまで、タンチョウ *Grus japonensis* は全道の湿地に広く分布・繁殖していた。しかし、食用のための狩猟と繁殖地の土地開発により、19 世紀末には絶滅に近いまで数は減り、分布域も局在し、その状態のまま 1950 年頃まで経過した。その後、冬期給餌成功による死亡率低下に伴い、個体群は急速に回復し、現在 1,500 羽ほどを数えるまでになった。その結果、越冬地における過密化と繁殖地における番いの高密度化が進行し、感染症へのリスクや過剰な人馴れなど種々の課題も生じ、その対応として、越冬期と繁殖期の両局面で分散化が提起されている。

上述のような個体群成長に伴い、釧路地方に集中していた群れは徐々に分布域を拡大し、収容力のポテンシャルが残る十勝、根室、網走への進出のほか、2000 年代前半からは北海道北部での繁殖も始まった。しかし、道内における繁殖適地の存在は限定的であり、リスクの軽減や個体群成長・維持を考えると、その将来は楽観視できない。

ただ、現在進行中の千歳川遊水地造成は、千歳川放水路計画中止の代案として浮上してきたが、かつてのツル繁殖地に造られており、ツルの個体群維持やリスク低減には見逃せない意義を持っている。その際、湿原生態系の上位消費者であるツルの存続には、多様な環境と生物種の存在が必須であり、遊水地に湿地としての十分な機能を付与することが求められる。

そのために、今後逐次造成される遊水地に対し、構造物に対する土木・河川工学的見地からだけでなく、将来的な維持管理に関する経済性も考慮しつつ、生物学や、さらには社会学研究者の参画も強く求められる。例えば、今年度完成する剣淵川遊水地の現状は、平坦地にイグサ類が密生し、タンチョウの繁殖環境として利用価値は高くない。そうした状況を改善し、植物遷移をどのように制御するかなど、湿原造成や維持管理の一つの実験場としてとらえることも必要で、湿原研究者や湿原学会の取り組みを強く期待したい。